

3 分科会 研究課題「教育環境整備に関する課題」

研究主題「地域とともに教育力の向上を図るための教頭のかかわりについて」

宮崎支会 1班

1 主題設定の理由

国の教育振興基本計画の目標の一つに、「学校・家庭・地域の連携・協働の推進による地域の教育力の向上」が挙げられ、三位一体となった学校づくりの重要性について述べられている。

また、宮崎県教育振興基本計画の目標の中に、「教育効果高める体制や環境の整備・充実」が挙げられている。地域の人的・物的資源を活用した社会との連携等により、学校が地域とのつながりを推進していくことが示されている。

さらに、第2次宮崎市教育ビジョンの目標においては、「地域・家庭・学校が連携した教育の充実」の施策の中で、家庭及び地域の教育力の充実が挙げられ、より具体的に地域とともに教育力を向上させることについて述べられている。

上述の内容から、学校教育において、学校と家庭を含めた地域全体で同じ方向性で教育力の向上を目指すことは、学校教育にとって必須条件であるといえる。そして、学校と地域を結ぶ重要な存在として、教頭の役割が大きくなっているといえる。

これらのことから、地域とともに教育力の向上を図るための教頭のかかわりについて明確にし、学校教育を円滑に進めていけるようにすることで、未来に活躍できる子どもを育てようと考え本主題を設定した。

2 研究のねらい

学校と地域が協働する活動について、地域の特徴及び地域とかかわる教職員の育成の観点から、教頭のかかわりを明確にすることで、学校が関係組織と円滑にかかわることができるようとする。

3 研究の概要

- (1) 地域の特徴を生かした活動と、教頭のかかわりについて
- (2) 地域とかかわる教職員の育成と、教頭のかかわりについて

4 研究の実際

(1) 地域の特徴を生かした活動について

海水浴場の職員の方々に、児童に向けて心肺蘇生法を中心とした命を守るための授業を企画している。1年生から学ぼせることで、救助や命に関する意識を高められている。

学校が地域の避難所の重要な拠点となっている。市役所と綿密な確認をすることで、避難所開設を円滑に行えるようにしている。また、防災に対する意識の高揚を図ったり、訓練等の改善を行ったりするために、近隣の大学と連携を図り、専門的な知識を活用できるようにしている。さらに、近隣で地域の特性が似ている学校と、協働して実践し「地域防災訓練」として避難訓練を実施することで、実践力を高めている。

学校の近くに螢が生息する環境があり、観察等が容易なため、総合的な学習の時間の中で、動植物の様子について地域の方や各関係機関の方から詳しく学ぶ機会を計画した。また、自然を美しく保つための意義を学ぶ時間を設定し、実践的な環境教育を行うことができた。

地域に伝わる「臼太鼓踊り」について指導していただけけるよう、保存会と繋がりをもち、地域の伝統芸能について子どもたちに根付かせることができた。

地域出身のスポーツ等で活躍している方による講話や県外からの移住者の方の講話を企画し、郷土愛を高めることができた。

教科等の授業協力について、社会福祉協議会と連携を図り、地域の方に協力を得られた。子どもたちが地域の昔の様子や祭りについてインタビューできるような時間や場所の設定をしたり、子どもたちと一緒に地域を散策し、防災マップを作成できるよう支援したりすることができた。

【教頭のかかわり】

- 児童が住んでいる地区や地域性等を把握し

ておき、学校経営と地域活動を結び、連絡・調整等のマネジメントを行う必要がある。

- 直接地域の人と顔を合わせながら関係づくりを行うことによって、学校の教育活動への協力依頼等がスムーズに行えるようにしている。
- 計画立案し、案内状作成・発送を行うことで、かかわりを把握することができた。また、受付名簿、レジュメ、資料などの作成等を行うことで、地域方々との連絡や相談をとおしたつながりが持続できた。

(2) 地域とかかわる教職員の育成について

自然環境の学習では地域の協力にお願いする内容が大きい。教頭がおおよその連絡調整を行い、相談できる体制を整えたうえで、学年担当に直接のかかわりを引継いだ。教頭が支援しつつ、担当に積極的に任せることで、担当自身が新たな考えを発案する等、意欲的なかかわりが見られた。担当と地域の方で細かな打ち合わせを直接行つたうえで活動するので、学習を円滑にすすめることができた。

昨年度から、地域の方の協力を得て米作りを始めた。企画、立案、物品購入、活動支援等、教頭が中心とならざるを得なかった。本年度は昨年度の実施内容をもとに学年担当に伝えながら改善点について話し合つた。そうすることで、学年担当の思いや願いをふまえた活動を行うことができた。また、地域の方々と学年担当とのつながりが増し、次年度へ実践的な引継ぎができるようになった。

本年度、採用3年目の若手職員に、4週間の本校出身の教育実習生の担当を依頼した。普段の授業や分掌部にかかる業務の様子、職員会や職員研修での発言から、十分に役割を果たす力をもっているという判断に基づき依頼した。本人は前向きに取り組み、期待どおりに実習生の指導を行つたことはもちろん、実習生の書いた実習記録から自身の学習指導や学級経営を振り返ることによって自信を深め、さらによりよい教師を目指そうとする意欲を高めることができた。

【教頭のかかわり】

- 年度当初から活動にかかる職員や地域の方々からの情報を整理し、職員等が異動にな

っても円滑な活動ができるようにしている。

- 学校で実践していることについて、一部の職員や管理職だけでなく、PCでの文書回覧を行い、職員にも周知を図ることで、誰もがかかることができるようとした。
- 実際に活動する学年と連携し、教頭が今までの活動の様子や計画等について提示し、安全に円滑に活動できるよう図っている。
- 地域の声を職員に伝え、職員に役目を割り振つたり、学年につないだりしている。

【(1)・(2)共通の教頭のかかわり】

- 校長の学校経営方針や地域の期待・願いを十分に把握し、目標を達成できるような、方向性を設定する。それをもとに、係の職員への指導、助言を行い、教職員の育成を図る。

5 今後の課題

- (1) 教頭がかかわりすぎることで、地域の自主性が薄れたり、活動そのものが目的となつたりすることがある。活動の目的を明確にし、職員や地域と共通理解し、教頭がかかわる必要がある。
- (2) 地域の思いを大切にしながらも、校長の思いを受けて具現化することを念頭において地域と学校を連携させなくてはならない。教頭がそれらについてバランスよく調整していく必要がある。
- (3) 地域とともに教育力の向上を図るために地域に啓発することが必要である。また、地域力が低下している場合、教頭としてどのような手立てが必要かについて考えていかなくてはならない。
- (4) 地域や各関係機関と教頭のかかわりの在り方等について、確実に引き継いでいくために、人材育成の在り方及び実用的な引き継ぎ書の在り方について明確にしていく必要がある。
- (5) 重要な役割を経験年数の少ない職員が担う状況が出てきている。そのため、教頭として職員の業務遂行の様子に気を配り、どのような資質・能力をもっており、どのような役割が適しているかを考えておく必要がある。